

田中 秀和（神戸大学大学院循環呼吸器病態学）

【留学先】Cardiovascular Institute, University of Pittsburgh Medical Center, ピッツバーグ大学

【テーマ】心エコー図による左室 dyssynchrony の評価と心臓再同期療法の効果

【経過報告書】

私は 2007 年 5 月より、ピッツバーグ大学循環器科の心エコーラボに留学しております。ピッツバーグは今年“全米で最も住みやすい街”に選ばれており、治安、物価など様々な面でとても住みやすく感じています。

私は John Gorcsan 教授のもとで、主に左室 dyssynchrony に関連した臨床研究を行っており、現在留学して約 3 ヶ月半が経過しましたが、仕事にも徐々になれ、充実した日々を送っております。臨床研究に関しては、豊富な症例数と最新の機器がそろっており、整ったすばらしい環境であるといえます。心エコーラボでの仕事は、自分の研究テーマに加えて、多施設大規模研究のデータ管理と解析、大学内で行われている他部門との共同研究など多岐にわたります。また、“Dyssynchrony”という分野に関しては、臨床の場においても我々リサーチフェローの仕事となっており、臨床医からエコーの依頼を我々がうけています。このようにピッツバーグ大学心エコーラボの長所は、我々リサーチフェローが、臨床研究は勿論のこと、Doctor、Nurse、Co-medical の人たちとコミュニケーションをとりながら、日常臨床の一つの歯車として働くことができることです。このような留学の機会にご支援くださった貴会、およびフィリップスメディカルシステムズ社にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

【帰国報告書】

私は 2007 年 5 月から 2010 年 4 月までの 3 年間、米国ペンシルバニア州にあるピッツバーグ大学循環器科の心エコーラボに留学しておりました。私は John Gorcsan 教授のもとで、2-D および 3-D speckle tracking 法、また tissue Doppler imaging 法を用いて Dyssynchrony、CRT に関連した臨床研究を行っておりました。John Gorcsan 教授はこの分野では世界的に有名な先生であり、学会等でたびたび来日されているので、ご存知の方も多いかと思います。また、彼は非常に親日家でもあり、日本食、日本文化、日本人が大好きです。特に関西地方がお気に入りらしく、京都に関しては関西人の私よりもはるかに詳しいです。

ピッツバーグは生活するにはとてもいい街で、2007、2009 年には“全米で最も住みやすい街”に選ばれております。地域経済が安定しており、治安、物価など様々な面で、実際とても住みやすく感じました。2007 年に始まったサブプライムローン問題や世界金融危機による、世界中を巻き込んだ経済危機の最中にあっても、ピッツバーグの経済は安定しており、求人は増加していました。また、2009 年はアメリカ 4 大スポーツの

うち、アメリカンフットボールのスティーラーズ、アイスホッケーのペンギンズが揃って全米チャンピオンに輝くという歴史的な年になり、ピッツバーグの街は活気に満ち溢れていました。さらに、2009年9月にはG-20(20カ国・地域首脳連合)も開催され、各国の首脳がピッツバーグに訪れました。このようなピッツバーグにとって歴史的な年に滞在できた事を誇りに思っています。

ピッツバーグ大学での臨床研究は、豊富な症例数と最新の機器がそろっており、整った素晴らしい環境であるといえます。私は特に2-D speckle tracking 法と後に開発された3-D speckle tracking 法に興味があったので、これらをCRT患者に応用し、CRT後の長期予後との関連などについて研究していました。研究に関しての日本との一番の違いは症例数です。本当に多いです。日本に帰ってからは単純なストレートで真向勝負をしても勝負にならないこともあるので、アイデアを駆使して世界と勝負していきたいと思いました。心エコーラボでのその他の仕事としては、Dr. Gorcsan が関わっている複数の多施設大規模研究のデータ管理と解析がありました。

ピッツバーグ大学では“Dyssynchrony”という分野は、臨床の場においても我々リサーチフェローの仕事となっており、臨床医からエコーの依頼を我々がうけていました。特にCRTの植え込み適応に悩むQRS幅が120ms前後のいわゆるBorderline QRSの患者には我々のエコー所見を参考にしていました。このようにピッツバーグ大学心エコーラボの長所は、我々リサーチフェローが、臨床研究は勿論のこと、Doctor、Nurse、Co-medicalの人たちとコミュニケーションをとりながら、日常臨床の一つの歯車として働くことができることです。

最後になりましたが、このような留学の機会にご支援くださった心エコー学会、およびフィリップスメディカルシステムズ社にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。